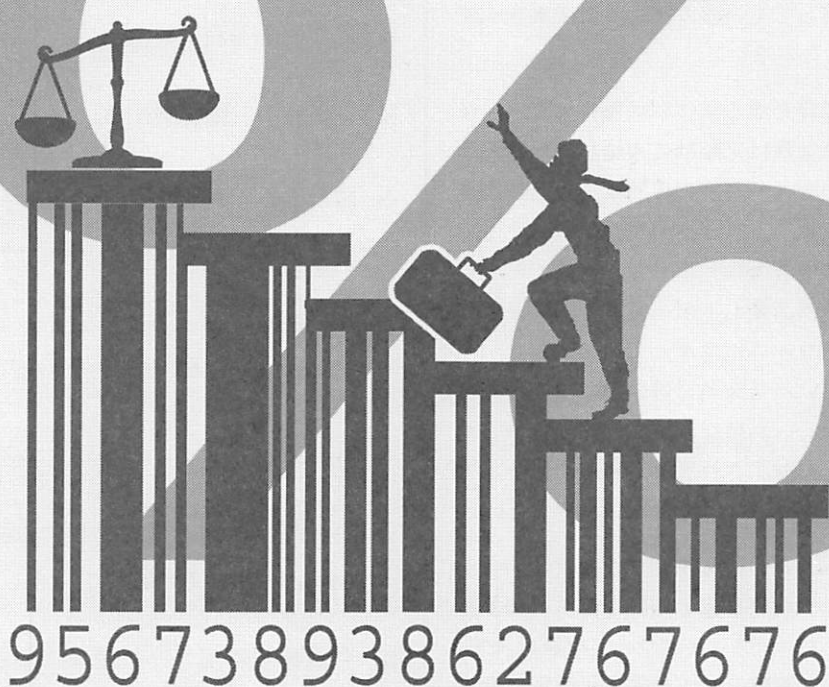


やすらぎ

平成19年・5月号・250円

「工業や技術がどれほど発展しようとも、将来、商売やそれがもたらすものの役割は、予想されている以上に、今よりもさらに大きなものとなっているだろう。さらには、国家や権力者たちはその助言を得つつ現れ、その助けによって存在を継続させるようになるだろう。」p.3



商売 & 無利子銀行

罪深い前髪

労働者と雇用者との関係について

ムスリムは帝国主義の罪を犯しているのだろうか？



イスラームの発祥地であるアラビア半島のマッカは当時、商業ルートの中継点として、またアラブ人の巡礼地として商業が盛んであり、支配層であるクライシュ族は商業を主産業として栄えていました。クライシュ族出身の預言者ムハンマドも、若かりし頃はシリア方面に向かう隊商貿易に従事したと伝えられています。このような背景もあり、聖典クルアーンでは信仰を商業に喩える表現がそこかしこに見受けられます。イスラームは商業を奨励していますが、公正な取引を行うこと、利子の禁止など、具体的な商行為に関する記述がクルアーンやハディース（預言者の言行録）に残されており、商業に関しても当時の墮落した風潮を正すための言及がなされたのでした。

その後、契約や売買を巡る法体制の整備も進み、イスラーム世界では全世界に先駆けて市場経済が開花しました。ムスリムの商人や経済の専門家による活躍が続き、国際的な交易ネットワークが発達し、人やものの交流が世界規模で盛んとなりました。版図の拡大のみならずこうした経済活動も手伝って、西アフリカや東南アジアまでイスラーム化は進んでいきました。イスラームが広まっていった背景には武力による制圧、支配があるのではなく、高度な商業活動にも象徴される文明の輝きに人々が魅了され受け入れていったことも挙げられるでしょう。

今日、世界は資本主義の経済体制で覆われていますが、貧富の差の拡大や利己主義の増殖など、その弊害も拡大しつつあります。一方でイスラーム経済は元来、共同体の公共の利益を基盤として構築され発展したものでした。利子をとらないイスラーム銀行など、近年はその理念を現代的なシステムに適合させる試みも打ち出されています。試行錯誤はこれからも続くと思われませんが、現代の問題点を解決していく上でかつて繁栄を極めたイスラーム的な商業の理念と方法論は参照に値するものではないでしょうか。



今月号 内容

- ☞ 編集部より 2
- ☞ 商売 & 無利子銀行 3
- ☞ 心を知る
イラーダ、ムリード、ムラード
（意志、望む者、望まれる者） 5
- ☞ 祈りのある毎日へ 7
- ☞ シミット 7
- ☞ 預言者ムハンマドを語る
希望の芽たちよ 8
- ☞ リサーレイヌールより
「年老いた人々へのメッセージ」 9
- ☞ 罪深い前髪 15
- ☞ 映画から考える『おいしい生活』
Small Time Crooks 17
- ☞ 労働者と雇用者との関係について) 19
- ☞ ムスリムは帝国主義の罪を
犯しているのだろうか？ 25





商売

商売とは、お金と品物という言葉をとおし、全てをその手中に収められるお方へ、糧を求めて願い出ることといえる。このように願うことは必ず実行されるべきだが、その願いをかなえられるのはアッラーであられるということをも、忘れてはいけない。

工業や技術がどれほど発展しようとも、将来、商売やそれがもたらすものの役割は、予想されている以上に、今よりもさらに大きなものとなっているだろう。さらには、国家や権力者たちはその助言を得つつ現れ、その助けによって存在を継続させるようになるだろう。

どの分野においてもそうであるが、商売や手工芸においては知識や熟練技能の持つ重要性がより高い。特にこの二つの職がその修業にかかっているものであることは、忘れられるべきではない。

多くのことが本で語られてはいるが、熟練工や見習いからたたき上げた親方などが持っている技巧のプリズムをとおすことがない限り、それらは期待に応じてくれるものとはならない。

ハラール・ハラームに十分な注意を払いつつ売買を行なう商人は、その仕事に携わってきた一分一分、これから携わる一分一分がイバーダと見なされる。

職場や商店の清潔さや秩序、あるいは不潔さや乱雑さはしばしば売り手や幹部の精神状態を反映するものであり、このこともまた顧客に対し否定的、あるいは肯定的な影響力を持つということも忘れてはいけない。

人を騙すような商人、策略家である実業家は、その振る舞いによってまずその神に、そして彼らの良心に対し、反抗したことになる。やがてはその計略がばれてしまうことによって信用も失墜し、利益という点からも大きな損失を受けるのだ。

商売の精神とは正直さ、信頼、自分の生きている時代への理解、顧客に対するとても細やかな、そして品を保った接し方である。これらのうちどれかを欠いている者は、商売の精神を台無しにし、したがって自らの利益を得る手段を封じてしまうこととなる。

商人たち、職人たちは、優しい言葉と笑顔、十分な謙虚さを持ち、約束をたがえず、決して

愛想を尽かしたり面倒がったりすることのない人であるべきである。どの職業においてもこれらは大切であるが、人々と共にあり、彼らの利益や損失に関わっているという点から、この二つの職業にとってはより重要なのだ。

職場を通常よりも一時間早く開け、一時間遅く閉める人たちにとって、一ヶ月は35日となり、一年は420日となる。当然、可能な限りこれらの職場で、その本来の任務が忘れられることがないことを前提として。

無利子銀行

利子を伴う施設は、それが国家によって運営されるものであれ、個人によって運営されるものであれ、社会構造を破壊するひとつの毒です。人間らしさや相互扶助が失われること、「自分」を中心にとらえた投資が優先されること、貧者と富者の間のへだたりがより大きくなること、そして何よりも悪いこととしてアッラーがハラームとされたということが、それらの特質として最初に思いつかれるものです。だから信者は、『罪と敵意に関して助けあってはならない。』という命令に従い、(他にどうしようもない場合を除いて)その概念やそれが実践されている場から遠ざかるべきなのです。

近い将来、無利子銀行と同じように、利子を伴わない経済システムが国家によって実行されるようになれば、人々を一ムスリムであろうとなかろうと全ての人々を、楽にするものとなるでしょう。現在の状況に続いて次には何が来るかを見極めることができない、未来を見通すことができない一部の国家要人や学者たちがそれを認めようとしないとしても、何が起こってくるか私たちは皆、それを眼にするでしょう。



アッラーよ、あなたの御名において、あなたに懇願いたします。

おお、満足させるお方よ おお、癒すお方よ

おお、約束を果たすお方よ

おお、心身共に健やかにして下さるお方よ

おお、いと高きお方よ おお、正しく導くお方よ

おお、受け入れるお方よ おお、裁くお方よ

おお、永遠なるお方よ おお、導くお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、
あなたの他に真の神は存在しません。
私達を地獄の炎からお助け下さい。*

レシピコーナー

シMITT

材料：125g² バター 30g² サラダ油 10g² 砂糖 30g² ヨーグルト 10g² 塩
ベーキングパウダー 少々 300g² ぐらい 小麦粉 黄身 1個 ごま 適量

作り方：

黄身とごま以外全て混ぜる。小麦粉が少なかったら増やして、耳たぶぐらいのかたさにする。

数字の0のような形にする 最後に卵を塗りごまをのせる 180度 20分

*ジャウシャン・カビール（偉大なる鎖帷子、アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り）には、祈願、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鍵が必要です。本来、（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。ジャウシャン・カビールのアラビア語/日本語訳オーディオCD・ROM またはプラスチックカバー本は出ています。詳細は：<http://www.isuramu.com/shopping>



イラーダ、ムリード、ムラード(意志、望む者、望まれる者)*

イラーダ(意志)は動詞であり名詞であります。動詞としては、二つのものから選択すること、望むことを意味します。名詞としては、人が己の思考と行動を方向付ける精神力を意味します。精神的生活のうちに生きた人々によって定義されてきたところによると、意志は現世的な欲望や反抗的な肉体的欲望を克服するものであり、そしてアッラーの意志への服従のもと、アッラーの望みやご満悦を自分自身のそれよりも常に優先させるものです。意図する信奉者(ムリード)は決して自分自身の力に頼ることはしません。そしてご自身の支配のもとにあらゆる創造を保持される全能のアッラーの意志に完全に服従します。望まれた者(ムラード)について言えば、その人はアッラーの愛に伴われて舞い上がりアッラーのご満悦を獲得すること以外の何ものをも考慮せず熱望しません。そのような人はアッラーに好かれているのです。

「主の御喜びを求めて」(家畜(アル・アンアーム)章 6:52)という節によると、意志はアッラーに到る道のりの最初の段階であり、永遠に向かって船出する最初の港です。無限に向かって出帆する人はほぼ誰もが、究極の目的地に到達するための機動力が獲得できるこの港にやってくるのです。この目的地に向かう旅は、旅人の意図の純粋さ、また旅人とこの世界や物質的なものとの関係の度合いや質、そしてこの港や、この旅に乗り出そうとする内なる願望に起因する原動力といったものに比例します。アッラーからもたらされる援助と信者の意志力の強さに比例して、ある者は港から目的地の距離を歩く速度で横断し、ある者は宇宙船や光の速度で渡り、また中には測定不能のスピードで到達する者もいるのです。預言者の昇天やある聖人がらせん状に上昇したこと、修道者による旅などは、意志や、意志を持った者、望まれた者が、真理であられるアッラーの援助によって後押しされたときに達成できる事柄を示す好例です。

意志と意志を持った者(信奉者)の間には派生的な関係があります。物質や自然の原因が外見上の見かけと神の偉大さや尊厳との間に横たわるベールである(だからこそ物事や事象の裏に隠された真実を理解できない者は己にとって好ましくないように思えるものについて全能のアッラーを非難すべきではないのです)のと同様に、人の意志力は「御望みのことを遂行なされる(星座(アル・ブルージュ)章 85:16)」お方の影のそのまた影にすぎないのです。影はもとのものがなければ存在しえないように、創造された意志もまた、創造主なくしてはありえないものなのです。同じように、鏡に映し出された活気や魅力も被写体の映像が備えているのではなく、被写体そのものが有するものなのです。そうは言うものの、このことを理解し影とオリジナルの区別をつけるのは

* この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

困難なことです。

旅人が、人の個人的な意志は(全てを望まれるお方の)絶対的な意志がぼんやりと反映されたものであると気づき、望まれた者、また肉体の囚われや純粋な精神性と良心を備えた人物になりたいという思考の囚われから解放された者という段階の遠きそして高みに到達するまで、信奉者は自分自身の意志を別個の独立した存在として捉え続けるのです。実に旅人は道の始めで望む者であり、道の終わりで望まれる者となります。僕であることが第二の天性として身につくよう努力している間、人は望む者であります。他方で、アッラーとの関係がその人自身の存在に不可欠な要素となったときに人は望まれる者となっています。愛され望まれるための道を模索している間、人は望む者となっていますが、アッラーの印をあらゆるものに見出しアッラーの知識と愛の糸で精神的な喜びというレース細工を編むとき、人は望まれる者となっています。

知識からもたらされる初期段階の確信と経験からもたらされる最終段階の確信との間には数多くの段階が存在します。どの段階も終わりであり同時に始まりであります。つまりある段階に続く道の終わりであり、ある段階から続く道の始まりであるのです。例えば多くの説によると「わたしの胸を広げて下さい(ター・ハー章 20:25)」は終わりであり、かつ「われは、あなたの胸を広げなかったか(胸を広げる(アッ・シャルフ)章 94:1)」と比較すると始まりであります。他にも「主よ、あなたに^{はいまつ}拝謁が出来るように、(親しく)わたしに姿を御現わし下さい(高壁(アル・アアラーフ)章 7:143)」は最終段階であると同時に、「(かれの)視線は吸い寄せられ、また(不^{ぶつひ}躰に)度を過ごすこともない(星(アン・ナジュム)章 53:17)」に述べられている段階へとつながる道の始まりとされています。また「決して。本当に主はわたしと共におられます。直ぐに御導きがあるでしょう(詩人たち(アッ・シュアラーウ)章 26:62)」はアッラーと一緒におられることの認識を意味しますが、「心配してはならない。アッラーはわたしたちと共におられる(悔悟(アッ・タウバ)章 9:40)」で述べられている高遠な真実、事実とは比べ物になりません。

旅の始まりにおいて、誠実さ、忠実さ、そして決意が根本的に重要となりますが、旅の終わりでは厳粛さ、冷静さ、礼儀正しさが最も重要となってきます。最初に過ちを犯した者は十分に進むことができません。一方最後に過ちを犯した者は叱^{しつこ}責され打ちのめされるでしょう。

意志の力が糧を得るための重要な供給源は、旅人が自分自身の責任を履行する際に注意深く細やかであること、そして常にアッラーに嘆願することです。さらに付け加えて言えば、全能のアッラーがその人のものを見る目となり、聞くための耳となり、つかむための手となってくださるよう、ひとえに崇拝における義務以上の行為や務めに忍耐強くあることにかかっているとと言えるでしょう。



年老いた人々へのメッセージ

15番目の希望

ある時、エミル山に流され、たった一人で家に軟禁されまるで独房にいるようであった。又私には大変厳しい監視と独断的な取扱いがなされていたので、人生にうんざりし、監獄から出たこと悲しんだ。私はデニズリの刑務所を心から望んでいた。そして墓に入りたいと思った。

刑務所と墓はこのような生活よりむしろ好ましく、そのどちらかに入ろうと決めた時、神の援助が齎された。「ゼフラーの学び舎」の教え子達の手が握るペンはまるでコピー機のようなものであるが、彼らの手新型のコピー機の一つが与えられた。価値ある光の書簡集のそれぞれが1本のペンによって、500枚写された。その勝利の序章により、その困難な生活は私にとって、好ましいものとなった。そして「無限の感謝をアッラーに捧げます」と言った。

その少し後、「光の書簡集」の姿の見えない敵達は、ヌール（光）の勝利をねたみ、私に対し行動をおこすように政府を扇動した。再び生活は私にとって厳しくなり始めた。すると、突然、主の援助が顕れた。最も光を必要とするこの件に関連を持つ政府の役人達は押収したそれらコピーを大変興味深く、注意深く読み始めた。そして、彼らの義務の仕事をする過程で、光の便りそれ自身に、彼らの心は好意を抱くようになり、批判の変わりに正しい評価し始めた。光の学び舎は非常に拡大した。物理的富みの100倍もの益を与えて、私の苦しみと不安はなくなっていった。

その後、姿の見えない敵達である偽善者達は、政府の注意を私個人に向けさせた。私の以前の政治的活動を思い出させた。彼らは裁判所、教育器官、警察、そして内務省にも疑いを抱かせた。諸党の成り行きと共産主義者たちの覆いに包まれた無政府主義者達の活動に酔って、その疑いは広まった。彼らに入った「光の書簡集」の一部分を押収し、私達に圧力をかけ抑圧し始めた。「光の書簡集」に従う者達の活動は行き詰まった。私個人を悪く見せようと考えて、一部の政府の役人達は誰もが信じないであろう中傷、訴えを起こした。彼らはむちゃな中傷を広げようとしたが誰も信じなかった。

その後、非常に粗末な口実を作り、彼らは冬の最も寒い間中、私を抑留した。そして刑務所の大きく大変寒い監房の独房に監禁し、ストーブなしで2日間私を放置した。私は小さな私の部屋では一日に数回ストーブに火をつけるのが慣わしだったが、衰弱し病気のためにそれでも耐えるのは困難であった。このような状態で寒さのために高熱にうなされ、厳しい困難と憤慨によってうごめいているとき、神の援助によって真実が私の心の中に、広がっていった。

精神的に「あなたはかつて、「ユースフの学び舎」という名前をつけたではないか。デニズリでも、あなたの苦しみよりも1000倍もの喜びと精神的益とそこに囚われの身となったヌール達の益、そして

広い範囲でのヌール達の勝利という成果は、あなたに不平の代わりに1000倍もの感謝を与えたではないか、一時多岐なときを永遠の時に変えた。インシャッラー、この3番目の「ユースフの学び舎」においても、災難にあうヌール達に益と癒しを見出させるであろう。そのことがあなたのこの寒く厳しい困難を活き活きとさせ、喜びとかえるであろう。そして、あなたが憤慨した男達も騙されていて知らずにあなたを抑圧しているのである。彼らへ憤慨はふさわしくない。もし知りながら意図的に逸脱し苦しめ、害をくわえているのなら、彼らはまじかに迫る死という刑を受け、墓という独房で監禁され、永遠の拷問と責め苦にあうであろう。彼らの抑圧のため、あなたは報奨を得、一時的な時を永遠の時と変え、精神的喜びを得、知識と宗教の義務をイフラーズ(専心さ)によって、行うことができるのである。」と、私の魂に警告し給うた。

私の全ての力を振り絞って『アッラーに称讃あれ』といった。人間的感情に従えばこの抑圧者達を哀れに思えた。「私の主よ、彼らを改善したまえ。」と祈った。この新件について内務大臣に当てた供述の中で書いたことだが、真の有罪者とは10の方法で違法を犯し法の名の元に非合法的な行動をする者達であるといえよう。

彼らは理由を探し聞く者を笑わせ、真実を愛する者達を泣かせるような中傷とでっち上げを公正な判断をする方々に示したのだが、「光の書簡集」とそれに従う者達に口を出すこともできなかった。法律と真実の点から見ても可能とも思えず、狂気じみていた。

たとえば、私を一ヶ月間スパイしたある役人は、何の罪も見出さなかったので、メモにこのように記した。「サイドの召使いが酒を店から買ってきて、それを彼に持っていった」と。彼らはそのメモにサインする者を承認として見つけることはできなかった。ついには酔っ払いの全くの他人を捕まえ脅迫してサインさせようとした。彼もまた、「アッラーが私達を御赦し下さいますように。この全くの嘘に誰がサインできますか」と言ったそうで、彼らはメモを破り捨てる羽日になったそうだ。

二番目の例：私が以前会ったこともなく、今でも知らないある方が私に馬を貸したそうだ。それで、私は外を出歩くことができた。夏にほとんど毎日、私の病のため新鮮な空気を吸うために、出かけていた。私は、その馬と車の持ち主に、価値50リラの本を与えると約束したそうだ。私は約束を破らないために、彼に借りがあるということだそうだ。このことでなにか罪を発見できるのであるか。しかし、それから役人も、裁判所も、そして警察も私達に50回、馬を誰が所有しているのか尋問した。まるでそのことが国家防衛に影響を及ぼす政治的な事件であるかのように！この無意味な質問を止めさせるために、二人の者がイスラームと信仰を守るため、一人は「その馬は私のものである」といい、もう一人は、「車は私のものである」といったために、二人とも私と共に逮捕されることと相成った。

このような例から考えてみると、子供染みたいたずらのように見えるが、笑いながら泣いた。「光の書簡集」とその学徒達に攻撃を加えようとする者たちは、彼ら自身が愚か者であるのだということを理解した。

それらの例の中から一つ面白い話をしよう。私の逮捕の理由は、「治安を乱したため」

と書かれてあった。私はそのメモを読む前に、検察官にこういった。「私はあなたのことについて昨夜話しました。『もし 1000 人の検察官、1000 人の警察官ほども、私がこの国の安全のために奉仕をしてこなかったのであるなら、3 度、神が私を呪うように』と、あなた（検察官）について語らせた警察官に応えました」と。その後、そのような最中に、休息、凍えから身を守ること、この世のことを考えないようにする必要があったのだが、敵意と悪意を感じさせながら、この耐えられない流罪、隔離、監禁、抑圧のもとに私を送った者達に怒りを抱いた。そのとき神の恩寵が救助に駆けつけた。そして私の魂に力強く警告した。

「人間があなたにした抑圧に相当する、公平で決定したまう神の偉大な割り当てがあなたにはある。」

「この刑務所には糧がある。その糧があなたをここへ呼んだ。それを受け入れ従うことによって、返礼すべきである。」

「あなたの自我とあなたの知らないあなたの過ちに対しても、10 に 1 の割り当てがある。その割り当てに対して赦しをこい、アッラーに向かうことによって、あなたの自我にこの平手打ちは正しいものであると言うべきである。」

「秘密の敵達と隠れたわなによって、幾人かの純朴な、そして疑い深い役人達の思慮のなさによって、その弾圧の元へ送ったことには彼らにもその割り当てがある。それに対して、「光の書簡集」によって偽善者達が打ち負かされた恐ろしい精神の平手打ちがある。あなたの復讐はそれらによって行われた。それが彼らには十分である。」

「最後の割り当ては、その理由となった公的な役人達である。この割り当てに対し、彼らのヌールたちへの批判的見方の中で、望むと望まないに関わらず、疑いなく信仰について得た益に敬意を表した。「・・・怒りを押えて人びとを寛容する者、・・・(イムラーン章 3/1 3 4)」の則に従い、彼らを許すことが寛大さである。」

私もこの真実の警告から、完全な喜びと感謝と共に、この新しいユースフの学び舎にとどまり、私の後に続く者達を援助するために、私自身に罰が必要であるとされた害のない罪を受け入れようと決めた。私のように 75 歳で、私に関連を持つこの世で愛する友人達といえ、70 人に 1 人が存命であるかどうかなのだが、そのヌールの役割を果たす 7 万の光の書簡集は永遠に残り、自由に歩きまわっている。

信仰のために奉仕する、一つの舌が 100 の舌に相当する兄弟達、後を引き継ぐもの達を見出した私のような者には、墓場がこの刑務所より 100 倍、善い。この刑務所もまた外を自由にあることができない精神的な抑圧の元での自由よりも 100 倍快適でより益がある。なぜなら、刑務所の外で私一人に対し、100 人もの監視する役人達の精神的抑圧を受けるよりも、100 人の囚人達の中で刑務所官と監視長のような二人の者たちのわずかな横暴な害のほうがより益を得ることになる。それに対して、刑務所の多くの友人達から兄弟のように過ごす恵み、癒しを見出せた。それと共に、イスラームの慈悲と人間の本性に基づいて、

老いた者たちに慈悲が齎^{しな}されたことが、刑務所の困難さを恵みへと変えると考え、刑務所生活を受け入れた。

この三番目裁判にやってきた時、衰弱と老いと病のため立っていることができなかつたので、裁判所の外で、腰掛に座って待っていた。すると突然、裁判官がやってきた。彼は怒っていた。そして、「なぜ立って待っていないのか」と背信者は言った。私も老いに対して、このような情け容赦のないとりに扱いに怒った。それから周りを見ると、数多くの信仰者たちが私のまわりに集まってきて、心から親切に兄弟としての態度を表し、彼らは散らばらずに、私達に注意を払ってくれているのがわかつた。そのとき突然、私とヌール達の姿の見えない敵達は私の望まぬままに、私に関する人々の関心と愛情の崩すことによって、ヌールの勝利を妨害できると考えた。騙されやすい数人の役人たちを騙し、私の人格について、国の名の元に、壊そうと考え、このような背信者のような振る舞いを起こさせた。これに対し、神の援助が、ヌール達の信仰への奉仕に対し、もてなしの一つとして、背信者一人の代わりに100人の人々に、あなた方の奉仕に対する称讃と親愛の情を表させたのである。そして、あなたに関心を持って快く出迎え見送ってくれている。

さらに又、2日目に私が尋問で、検察官の質問に私が応えているとき、政府期間（法廷）の中庭にある裁判所の窓に集、1000人ほどの住民達が強い関心を持って集まっていた。みんな一斉に言葉で、「これらの人々を締め付けしないで下さい」と言いあっているのが彼らの様子からわかつた。警察官たちは彼らを追い出すことはできなかつた。

その時、私の心に忠告されたのだが、この住民達はこのような危険な状況においても、完全な癒しと光と強い信仰と永遠の幸福への正しい善い知らせを望んでいると。それらを自然に探し始め、「光の書簡集」の中で見出しているのを日にしたので、私のような取るに足らない一個人に対し、私がした信仰へのわずかばかりの奉仕に対し則を越えたほど関心を私に示していたのだ。

二番目の真実、

治安を乱すという思いこみ、私達に裏切り行為をすること、そして私に関する人々の関心と愛情を砕くこと、以上の目的を持つ尊大で騙されやすい視野の狭い者達の冷遇に対して、限りなく真実を愛する者達と未来の世代に消散され喝采を受けるだろうと私は警告された。さよう、共產主義者の多いものも無政府主義者達の公共の治安を破壊しようとする激しい活動に対し、「光の書簡集」の学徒達は心の信仰の力によって、この祖国のあらゆる地でその激しい破壊を阻止しようと努めている。国中どこでも見出し出せるが、国の安全と治安を守るため、励んでいる数多くのヌールの学徒達から、20年間の事例に関する3、4回の裁判と10県の警察官たちによっても、なにも(罪を)見つけることはできなかつた。学徒達に関する治安を乱すという違反を含めて、彼らは何の事件も見出せず、記録することもできなかつた。そして、3県の情け深い一部の警察官たちはこう語ったそうである。「ヌールの学徒達は心の警察官である」と。治安保持に関して私達を擁護^{ようご}した。真の信仰によって、ヌールのような人々はみな、それぞれの脳に禁止事項を植え付ける。そして治安を守るために働いている。」

この例はデニズリでの刑務所でのことである。ヌール達と投獄された人々のために書かれた「信仰の果実」がそこで入手されることにより、3、4ヶ月の間に200人以上の囚人達は非常に従順に、大変敬虔に有徳なふるまいをするようになった。過去に3、4人、人を殺したものが、南京虫さえ殺せぬほどであった。完璧に情け深く害のない祖国に有益な者達となった。公的役人達でさえ、この状態を見て非常に驚き賞賛したものであった。一方、判決を受ける前に一部の者達はこう語った。「ヌールの人々は、刑務所に残ったなら、私達は私達自身を有罪にしようと努めるだろう。そうすれば彼らから学び彼らのようになることができるだろう。彼らからの教えによって私達自身を改善できるであろう、」と。このような存在であったヌールの学徒達を「治安を乱す」という罪で告発するもの達は、恐らく最悪な方法で欺かれ、騙され、知ると知らずに関わらず、無政府主義状態を利用して政府を騙し、私達を圧力で抑圧しようとしている。

私達はこれらの者に対してこう述べよう。

そもそも死は殺すことはできない。墓は閉じることはできない。この世という客間でこの旅人達は大変すばやくあわただしく隊商のように後から土の中へ入り、消えていく。もちろんまもなく私達の一人一人にも別れが来る。あなた方はあなた方が抑圧したその罪を恐ろしい形で見ることになるであろう。少なくとも抑圧された信仰者達について除隊除名である死と復活のない永遠の無の苦しみとなるであろう。あなた方の楽しみは永遠の悲惨な苦悩に変わるであろう。

残念そうに姿の見えない偽善者である私達の敵達は、この敬虔な国の100万もの神の位階では殉教者と勇敢なガーズィー達の血と剣によって、手に入れられ、保護されたイスラームの真実に対して、ターリカの名を借りて攻撃する。

ターリカの方法は太陽を唯一の光線であるとする。一方彼らはそれを太陽として見せる。政府の不注意な役人達をだましクルアーンとイスラームの真実に対して、影響を強く及ぼし、活動しているヌールの学徒達にターリカや政治的集団と名をつけ、私達を扇動しようと望む。

私達は私達について彼の話しに耳を傾けるもの達にデニズリでの裁判で私達が語ったことを繰り返すのみである。

何百万人もの人が喜んで身を捧げた聖なる真実のために、私達も身を捧げる。この世が私達を焦がす火に作られたとしても、クルアーンの真実に捧げる身は信仰のない人々に屈することはなく、聖なる義務をあきらめることもないであろう、インシャッラー

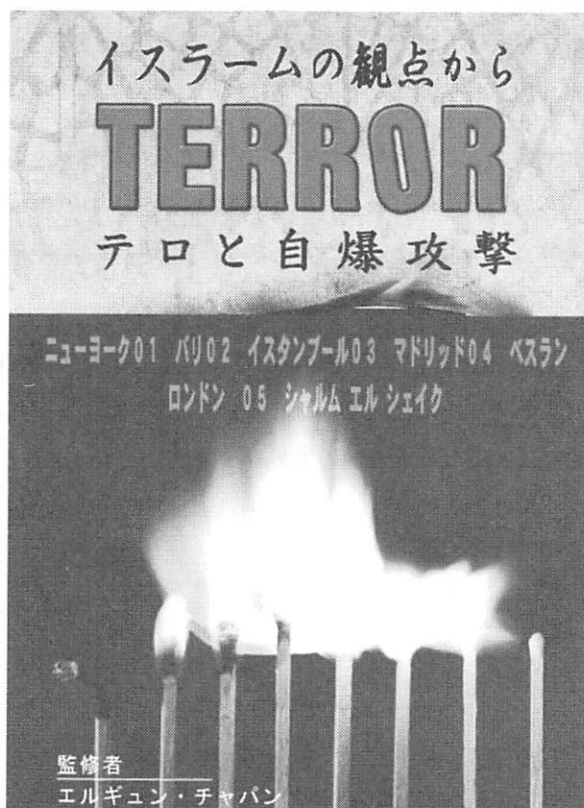
さよう、私の老年期に数々の珍しい出来事によって生まれた伊丹と絶望に対し信仰とクルアーンからもたらされた聖なる癒しによって、この老いの最も厳しい年月を幸せな若さの10年と取り替えることを私はしない。

特に刑務所で義務の礼拝をし悔悟する1時間は、それぞれ10時間の崇拝行為に相当し、病と抑圧のつかの間の1日は、報奨の点から見れば、10日の永遠の聖を勝ち取らせ、私のように墓の門の前で順

番を待つ者にとって、どれほど、感謝すべきことであるかをその心ある忠告によって私は理解した。「無限の感謝を我が主に」に、唱えた。そして私の老いを喜び、刑務所の生活を受け入れた。なぜなら、人生は止まらぬ。すばやく過ぎ去っていく。喜びと幸せで過ごすのなら、喜びの消失は苦悩となるため、受け入れられることもなく感謝もなく思慮のなさによっていくつかの罪を起こすことにもなり、つかの間のものとなり、消え去る。もし刑務所にあり、困難な状況で過ごすなら、苦しみの消えることが精神的喜びとなり、それはある種の崇拜行為と見なされるため、その点において永遠にのこり、尊い果実と共に永遠の生活を勝ち得る。過去の罪も間違っただけで監獄に入れられたことにより、帳消しとなり、清められる。この点において囚われの身となったもの達は忍耐とともに感謝すべきである。

新しい本出版されました! ご注文をメールや手紙や HP からお待ちしております。

「イスラームの観点から テロ と 自爆攻撃」監修者:エルギュン・チャパン,950円 (116ページ)



<http://www.isuramu.com> にあるその他の出版物:

- 「ジャウシャン・カビール」"アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り"(本) 750円
- 「ジャウシャン・カビール」(オーディオCD 2枚 アラビア語と日本語朗読) 1500円
- 「イスラームの信仰の元で」M.F.ギュレン 1200円
- 「預言者ムハンマドを語る-第二巻」M.F.ギュレン 1200円
- 「預言者ムハンマドを語る-第一巻」M.F.ギュレン 1200円
- 「やすらぎへの道」サイド ヌルシ 400円
- 「神秘と詩の思想家 メヴラーナ」エミネ・イエニテルズィ 3,150円
- 「イスラームにおける信仰の基本」ルティファイ・シントウルク 300円
- 「月刊誌やすらぎ」2004年度、2005年度、2006年度 製本 各1000円(郵送料別途加算)



希望の芽たちよ

教えの真実をこの世に再びもたらし、それを広めるのはあなたたちである。あなたたちは若い芽であり、光の源である。それらは、闇の時代にこの世を光で満たし、天国の木のように、枝や葉や花となって広がっていった。その時、我々の祖先は、他の民族からも信頼される国家を作り上げたのである。インシャラー、我々が今いるこの暗い日々を乗り越え、あの輝かしい時代をあなたたちが甦らせるのである。地の上の者も、地の下にいる者も、これを待っている。魂という形で常にあなたたちと共におられ、あなたたちが気が付かなかったとしても、時には頭をなで、背中をさすられる預言者ムハンマドも、その希望に満ちたまなざしで、慈愛に満ちた微笑と共に、それを待たれているのである。

あなたたちが、信頼できる人として道を逸れず、常に周囲に信頼を与えることができれば、それに成功できれば、その時全ての人の心の扉はあなたたちに向かって開かれ、当時の人々のようにあなたたちもその心に玉座をもたらすことができるだろう。忘れないでほしい。この結果に到達するために最も重要なことは、信頼に答えることである。

この世界の均衡が新たにされる時、その均衡の要素となること、世界の運命に関わるような重大な決定がされる時に意見を問われるような民族であることを望むならば、まず私たちは正義と、公正と、誠実さと、信頼の象徴であらなければならないのである。





「断じてそうではない。もしかが止まないならば、われは前髪でかれを捕えるであろう、嘘付きで、罪深い前髪を。」(凝血章第15節・16節)

脳の機能に関するこれまでで最も驚くべき研究の一つは、ある労働災害に関連して行なわれました。この研究の対象は25歳の現場主任フィニス・ゲージでした。彼はヴァーモントの鉄道建設現場で働いていました。1848年9月13日、ゲージは岩を爆破させるため、ダイナマイトを岩の穴に詰めていました。詰めるのに使っていた鉄の棒が岩を打ちつけ、火花を散らしました。その結果、その棒(3フィート7インチ、13と2分の1ポンドの棒)が、左の耳の下から頭の最上位まで彼の頭を貫通したのです。この恐ろしい事故は、ジョン・ハーロウ博士によって「鉄の棒による頭部貫通」という書類にまとめられています。

この事故は、両側の前頭葉のかなりの部分に損傷を与えました。しかし信じられないことにゲージは一ヶ月で回復し、事故の後も12年間生きたのです。ハーロウ博士は彼と接触を保ち、事故の後の彼の人生を説くもう一つの論文を20年後に書いています。ゲージの性格は大きく、そして不可逆的に変わってしまったのです。ハーロウ博士は次のように書いています。

「彼は落ち着きがなく、非礼で、時にはこの上なく粗野で粗暴となる。以前彼はこのようではなかった。友人達にはわずかでも敬意を抱いているが、彼の欲望と衝突する場合はその制御やアドバイスに耐えられず、頑固で気まぐれで、心が揺れている状態である。彼の友人、知人が『彼はもはやゲージではない。』といったほど、彼の精神は劇的に変化してしまった。」

前頭葉への損傷が原因で、ゲージは機嫌の悪い子供のように振舞うようになったのです。

脳の機能に関するもう一つの文献は、脳の一部を取り除かれた患者への追跡調査論文からのものです。前頭葉白質切除法(ロボトミー)は、統合失調症の患者に対して主に行なわれた、前頭葉の外科的除去を意味する言葉です。脳の重要な部分を破壊するような技法が治療のアプローチとして使用されると想像することは、現代においては困難かもしれませんが、しかし1949年にはこの前頭葉白質切除法(ロボトミー)を開発したとしてエガス・モニス博士にノーベル医学賞が与えられたのです。(モニス博士自身は、この手術を施した患者に撃たれ、部分的な麻痺を持っていました。)何万人もが、第2次世界大戦の後でこの手術を受けていたのです。

いろいろな技術が、前頭葉に損傷を与えるために用いられました。目の上の部分から細い骨を通してメスを入れ、正面の脳域を破壊するためにそれが中央や左右に振られるという技術もあり、数千人はこの方法で手術を受けました。時にはそれは「アイスピック精神外科」と呼ばれていました。この手術は患者のIQや記憶能力をはっきりと変化させることはありませんでしたが、その他にいくつもの甚大な副作用をもたらしたのです。

ここで示された事柄は、私たちの脳の機能を理解する上で二つの重要な情報の源を明らかにしてい

ます。脳に障害を起こさせる事柄は、ゲージのような場合と心因性障害を持つ患者への外科的処置のような場合双方において、特定の機能が弱められることによって、破壊された部位が脳のどの機能を携わるものであるかを明示するものです。まだわずかな手がかりしかないにしろ、近年、神経学者は、広範囲なコミュニケーションと情報の共有がこれらの部位の間に存在すると考え始めています。

前頭葉は多くの神経情報が収束・統合するような部位の一つです。それは高度な情報処理が行なわれる、高度に発達した部分です。上記で示したような科学的データのもたらす光によって見るなら、額や前髪に言及するクルアーンのいくつか章句に秘められた英知が、倫理価値の形成や意志決定という脳の正面の機能に関するものであるかもしれない、と思わずにはいられないでしょう。

クルアーンで神は仰せられます。

「断じてそうではない。もしかかれが止まないならば、われは前髪でかれを捕えるであろう、嘘付きで、罪深い前髪を。」(凝血章第15,16節)

ここでのアラビア語の単語ナシャフは、額とも、顔とも訳すことができます。これらの章句についてアブドゥッラー・ユスフ・アリーは、この語を前髪と解釈し、前髪は額にあり、それは人の力や尊厳の頂点のシンボルであるとしています。それをつかんで捕えることは大きな屈辱なのです。

私たちはまた、罪を犯した者がその前髪で捕えられているという記述をも、クルアーンに見出すことができます。

「罪を犯した者にはその印があり、かれらは前髪と足を捕えられよう。」(慈悲あまねく御方章第41節)

クルアーンのもう一つの章は、額が痛めつけられることを示しています。

「その日、それら(の金銀)は地獄の火で熱せられて、かれらの額やわき腹や背に、焼印が押されるであろう。『これはあなたがたが自分の魂のために、蓄積したものである。だからあなたがたが蓄積したものを味わえ。』」(悔悟章第35節)

ここで用いられているアラビア語ジャブハは、人の額を意味するものです。

これらの章句は、意志決定と倫理価値の形成における、脳の正面の領域の重要性を示しているのでしょうか。私たちが「自由意志」と呼ぶ意志の決定は、人間を他の全ての被造物よりも高め、彼らの方にその創造主の「信用」を置きます。この「信用」とは、人がその人生における神の意図を理解し、しもべとして使えながら生活を送るという任務を果たすようになる、という信用です。前頭葉は他のより未発達の動物においてはより小さい、という点も興味深いものです。人間は最も大きい前頭葉を持っているのです。

啓典を下されたお方は全知であられます。しかし、しっかりと見つけ十分に熟考することが、知性や理性を与えられた人間の責任なのです。

『おいしい生活』 **Small Time Crooks**

「自分で店を構える」「起業する」というのは、ある程度の能力と野望を持った人ならば一度は考えたことがあるフレーズなのではないでしょうか。残念ながら私自身はそういう能力は一切無いので、そんなことを考えたことも、ましてや実行に移そうとしたこともありません。しかし外国を旅して周っていると（もしかしたら日本でもそうなのかもしれませんが）、しばしば「自分で商売をする」夢を熱く語る若者に会います。そしてその熱い語りを聞いていると、なんだかうまくいきそうな気がしてくるものです。だからといって私はお金を持っているわけでもなく、何かサポートができるわけでもなく、結婚してあげられるわけでもないで、「じゃ、がんばってね」と言って去るのがいつものことなのですが、その後彼らと話をしても「ホントにやった」「うまくいってる」という話は聞いたことがありません。（もちろん、中には何かを成し遂げた人もいるのではないかと思うのですが）

商売って難しいものですね。アイデアがあってもお金が無ければ始められませんし、始められたとしても、うまくいくとは限りません。いいものを扱っていても、売れないこともあります。逆に、そここのものでも売れることがあったりして…。

今回ご紹介するのは、ひよんなことから意外な商売がとつてもうまくいった夫婦の話です。

レイ（ウディ・アレン）は自称大泥棒だったが、今となっては皿洗いをして働き、元踊り子でミートボールスパゲティとクッキーしか作れないフレンチーとニューヨークの汚いアパートでつましく暮らしていた。結婚25周年を迎え、レイはフロリダでのんびり暮らすという夢ため、人生最後の大仕事として銀行強盗を思いつく。それは、銀行の数軒先にある空き家から地下道を掘って銀行の金庫へ向かう、という計画。

穴掘り作業のカモフラージュのため、買い取った空き家はクッキー屋に改装、フレンチーの手作りクッキーを売り始めたところ、大繁盛。二人は銀行強盗をする前に、正真正銘の大金持ちになってしまうのだった…。

もちろん、商売繁盛→夫婦円満→夢がかなってハッピーエンド、とはいかず、そこにはいろいろあるわけです。「大金を手に入れる」という当座の夢がかなって、まず二人がしたことは元々の夢だったフロリダに直行することではなく、社交界へデビューすること。お金によって手に入れられるものに夢中に

なっていくフレンチーをよそに、どんどん着いていかれずに取り残されていくレイを見ていると、お金ってこんなにも簡単に人を変えるのかー、と、わかりやすく納得できます。

もちろんお金を稼ぐこと自体は悪いことではないのですが、その使い方が問題なのです。お金で得られる日の前の高価な物や楽しそうな事だけでなく、その先にある、結局はお金で買えないものにも目を向けなければならないでしょう。お金はあって困るものではありませんが、それに気を取られすぎてはいけませんね。

さて、冒頭の話に戻りますが、私が出会った「起業アイデア」豊富な人々は、資金が無くて実行に移さないことが多かったです。しかし、次に会ったり話を聞いたりしたときには、全然違うアイデアをまた目を輝かせつつ話しているものでした。どうしようもない奴だ、といえどそれまでですが、見習うべき(?)前向きさもあると思います。

今回ご紹介したこの映画、「理想を実現させても、物事はそうそう思ったとおりに行かない」というテーマらしきものはあるものの、徹底して娯楽を追及しています。ベタな展開のベタな話。まあ、クッキーでも作って、のんびり夢に思いを馳せつつ見るのもいいのでは？

『おいしい生活』 2000年 アメリカ 95分

監督：ウディ・アレン

出演：ウディ・アレン (レイ) / トレーシー・ウルマン (フレンチー) / ヒュー・グラント (デビッド)
ほか





³労働者と雇用者との関係について

他者の所有する職を、報奨を対価として行なう責任を負った人を労働者と呼び、その職を所有し資本力を手にしている人、報奨を与えることによって他者を働かせる人、彼らに継続的な労働を確保させる人を、雇用者と呼ぶ。雇用者は個人でもありうるし、財団、会社、国家のような法人でもありえる。

雇用者と労働者の区別が、それぞれ別の階級として現れるのは、経済活動が大規模で行なわれるようになった時代に特有の事象であり、特に西洋に見られるものである。労働生活において、はたらきが貸与される、もしくはそれを貸与すると言う面で労働者と雇用者（仕事を与える者）という表現はイスラーム世界にも存在する。しかしこの区別は、労働階級、プロレタリア、パトロン、ブルジョワジーといった概念によって連想されるようなものとは完全に異なる。

ムスリムの社会生活においては、階級間の区別、衝突、闘争といったものは決して存在しえない。なぜならイスラーム社会は、宗教上の兄弟であることを基本とし、それぞれが自分の率いる群れに対し責任を持つ羊飼いのようであり、どのような些少な善でも、あるいは悪でも、かならず来世でその見返りを受けるという信仰に結びついた道徳の上に形成されているからである。だからムスリムにとって「労働者」という表現は、個人的な概念なのだ。なぜなら人々はこの公正な均衡のもとにあつて、いつまでも労働者、労働者であり続けるわけではないかもしれないからである。昨日まで労働者であった人が、今日は富裕者となるかもしれない。今日は自分の労働によって日々を過ごしている人が、明日には富を共有したり、農業を共に行なったりといったようなパートナーシップを利用して、雇用者としての地位を獲得するかもしれない。

a) 労働－資本の闘争

労働と給与、労働と資本というテーマは、社会革命史にすら関わる非常に重要なものである。実際、ベディウツザマン師は、「この世界における革命とは何か」という問いに、「労働が資本と戦うこと」と答えている。金持ちがわずかな賃金を見返りとして、貧しい人々を自分達の召使のようにすること、つまり資本家達が労働者達をわずかな給料で雇用することが、大きな革命の原因となったことは注意をひくものである。そう、社会主義、ボルシェビック主義としてまずロシアを苦しめ、そして世界中に広がった労働－資本の闘争は、富裕者と貧者の間に深刻な敵意と憎悪をもたらした。朝から晩までわずかな賃金の為に身を粉にして働き続ける貧しい人々の心に、銀行を媒介として一日に何百万と稼ぐ資本家達への敵意が芽生えたこと、各地で人々が奮起することによって始まった階級間の闘争は何年も続いたのであった。

そもそも、闘争の根本的な部分を形成しているテーマは非常に単純なものである。「資本が本質なのか、あるいは労働が本質なのか。」

³昔々ニューフラテス川のほとりに、民衆から慕われたスルタンがおりました。壊れたつぼで水を汲み、愛するスルタンに捧げた人がおりました。もともと水源そのものがスルタンの所有だったので、このこわれた壺では、なかなか水をすくい上げることができません。それでも、一生懸命水を汲もうとした貧しい人のお話が伝えられています。

「こわれた壺」はその話に因んでいます。M.F.ギュレン師が語っている言葉を文字にした文章の訳です。(HPからの転載)

当時から今まで、いろいろと論争されたことはすべて、このテーマの周辺に位置するものであった。しかし最初の段階で誤ったところに入り込んでしまい、そこから抜け出すことができないでいるのだ。

経済システムの一部は、資本を基本と見なし、それを全てだとしている。そして「資本がなければ何事もできない。」という見解を維持し、人の汗や努力に一切の価値を見出さない。彼らによれば、労働者は地下の鉱山で働こうと、通路で息がきれようと、畑で鎌を振るおうと石を背負おうと、労働というものの価値は限られたものにすぎない。労働者に支払われる賃金も、資本を使えるようにしてやる為、であり、喜捨のようなものと見なされる。このようにこの見解においては、資本はまさに崇拜の対象となることが求められ、過去の世界のやすらぎをある意味で破壊したと同様、今日でも多くの民族や国家を、この見解が飲み込んでしまっている。

これへの反応として登場した一部のシステムや見解では、労働を神聖化し、「全ては労働によって成り立つ。」と訴え、新たな偶像を持ち出したのである。この見解によるなら、資本は単に抑圧の手段であり、資本家とは労働者の血を吸う寄生虫のようなものなのだ。

双方の思想における極端な両極化は、一定の時期においては非常に大きな規模に達した秩序の覆乱や分裂をもたらした。この不幸な時代は、人々が路上にあふれ、荒波にもまれ、世界規模での階級間衝突が起こった暗い時代の一端となったのである。もちろんこの間には、集団での誓約やストライキ、工場閉鎖等に解決策が求められもした。しかしこれら全てが何十もの傷口への手当てに力の及ぶものだったのか、あるいはそれを悪化させ、壊疽させるものだったのか、その答えは時が示すであろう。



b) 労働—資本への、イスラームによる捉え方

このテーマをイスラームの観点から見ると、労働と資本とは魂と肉体のように一つの完全体なのである。魂、すなわち労働が基本であり、肉体、すなわち資本はそれに結びついたものである。資本における均衡、システム、つりあい、勢いや活発さは労働にも直接関わるものである。

「今日の資本は、昨日の労働への対価である。」と語ったマルクスは、労働と資本の結びつきへの一つの見方を示している。一つの見方、とここでは述べる。なぜなら当然、全ての資本が労働に頼ったものと見なすのは正しくないからである。私達の状態や私達の生きる世界を細かく見ていくなら、無数の、最初に与えられた時には何の労働もそこに存在せず、無償で与えられており、いつでも恵みを受けているものがあることに気がつくだろう。

異なる観点から見ていくなら、マルクスのこの観点には正しい部分がないわけではない。なぜならアッラーは「人間は、その努力したものを以外、何も得ることは出来ない。その努力（の成果）は、やがて認められるであろう。やがて報奨は、十分に報いられる。」（星章第39-41節）と仰せられているからである。吉報を明言するクルアーンの章句のこの表現を鑑みるなら、資本のもとに労働が存在しているという真実も見出すことができる。この観点から見ると、やはり基本は労働であり、資本はそれに隷属するものであるということが出来るだろう。しかしこの見方は、資本を価値のないものとするのではなく、労働を崇拜の対象物とするものでもない。

他者がどのような見方をとろうと、イスラームは労働と資本とを並べ、それぞれの権利をそれぞれの権利の対象者に、遅れることなく与えたのだ。なぜなら預言者ムハンマドは、「労働者を雇う者は、しごとを始めさせる段階で、彼に与える賃金を明らかにしなさい。」とおっしゃられているのだ。また「あなたが働かせた人々への賃金を、彼らの汗が乾く前に与えなさい。」ともおっしゃっておられる。これによって一方で労働を褒め、同時に資本家にも目を向け、雇用者の権利の侵害や労働法の蹂躪じゅうろうなどがハラームとされている。

一方で預言者ムハンマドは、時折、ウンマの注意を喚起する為に語られた話の中で、信者である雇用者が、労働者の努力を評価し、彼をも資本の持ち主とすることを奨励されている。「洞窟の出来事」とも言われるある聖ハディースで、次のような出来事が語られている。

夜をすごす為に洞窟に入ってきた三人の人が、山から落ちてきた大きな岩が転がり込んで入り口を塞いでしまったことによって、そこから出られなくなっている。そこで順番に、アッラーの御前において認められると考えている行為を媒介とし、アッラーに、岩が転がっていってしまうよう願う。一人日は母や父に良く振舞ったことを媒介として願う。二人日は、まさにハラームを犯そうとし、純潔を汚そうとしたその瞬間にアッラーへの畏怖によって思いとどまったことをドゥアーに取り入れる。二つのドゥアーに対して、岩はわずかに動くが、しかしそこから出られるほどには隙間ができない。

三人日の人は次のようにドゥアーを行なう。

「アッラーよ、私は一人の労働者を雇っていました。他の労働者に賃金を払ったのと同様、彼にも賃金を払おうと思いました。しかし彼は私が示した賃金を認めず、『それは受け取らない』と言って行ってしまったのです。彼には一頭の羊を与えるはずでした。彼が行ってしまったので、私は羊を繁殖させ、何年か後には一頭の羊が大家族に増えていました。そんなある日、あの男がやってきて、自分の権利を求めました。私は群れを見せ、これがあなたの権利だ、と言いました。『私は貧しい人間だ、からかわないでくれ』と彼が言ったので、『神に誓って、からかってははいない。あなたが受け取らなかった羊が、こうなったのだ。今こそ受け取って、連れて行きなさい。』と言いました。彼は喜んで、群れを全て連れて行きました。主よ、私はあなたゆえにこれを行なったのです。もしこのことをお慶びくださるなら、洞窟の入り口を開けてください。」

このドゥアーの後、岩は完全にどけられ、彼らは皆外に出ることができたのだ。

預言者ムハンマドはこの出来事を語られることによって、社会生活における安定や信頼への基盤となる、三つの重要な項目を示しておられる。老人に良く振舞い、両親の権利を守ること、純潔を守って生き、そして他の人々の純潔を侵害しないという徳、そして労働者を共同経営者のように見なし、彼が資本の所有者となれるよう努力することの重要性を示しておられるのだ。

重要な点は、イスラームは、資本についても労働についてもその存在を認め、次のような原則を示していることである。労働者は仕事にしっかりと取り組み、あらゆる能力を駆使して行い、雇用者は労働者の奉仕の対価を適切な時期に、そして完全に支払う。イスラームによるなら、雇用者が労働者を抑圧したとしても、労働者は雇用者に対し暴挙で応じてはいけない。同じことが逆の場合にも適用される。他者の抑圧は、人を、同等のことを正当な権利を持って行なえる状態とするわけではないからである。「あなたがた信仰する者よ、アッラーのために堅固に立つ者として、正義に基いた証人であれ。人びとを憎悪するあまり、あなたがたは（仲間にも敵にも）正義に反してはならない。正義を行いなさい。それは最も篤信とくしんに近いのである。アッラーを畏れなさい。アッラーはあなたがたの行うことを熟知なされる。」（食卓章第8節）という章句に

対して、労働者であろうと雇用者であろうと全ての信者は恐れ震えるべきである。そう、イスラームは、それに属する人々に獲得させたこの見方によって、このテーマに精神的な側面を与え、資本と労働の間にしつかりした結びつきを与えているのだ。

c) イスラーム社会における労働者と雇用者の関係の実際

イスラームが描くモチーフにおいて、労働者と雇用者は同じ体の部分部分のようである。双方の間に憎悪や敵意、不運な結びつきは存在しない。なぜなら労働者も雇用者も、職業倫理を尊重し、お互いの権利を守るからである。

そう、労働者はその額の汗が乾かないうちに自分の権利分を受け取る。同時に、自分が担当している仕事を進ませ、適切な形で完成させ、雇用者の権利を保護する。預言者ムハンマドはそのお言葉の中で、最良の利益とは、十分に気をつけて仕事を行ない、雇用者にも敬意を示しつつ得たものであると語っておられる。信者である労働者はその作業を、アッラーに対し、預言者ムハンマドに対し、そして全ての信者に示すように行う。このような人が雇用者の権利を侵害することはありえない。このような見解を持つ人は、時間を無駄にすることもなければ、払うべき努力を怠ることもない。なぜなら彼は、自分の行いが一つずつ問われる日が訪れることを信じているからである。

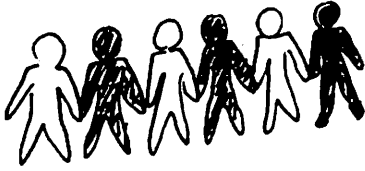
信者である雇用者にとっては、自分の指示に従って働く労働者は兄弟のような存在である。自分が食べているものから食べさせ、着ているものを着させ、彼らの力以上の荷を負わせない。労働者の兄弟達の権利を、アッラーの権利として見なす。そしてアッラーの取り分を分けて置くことなく自分が口にするものが全て、ハラームとなることを意識している。雇用者はまず、労働者の権利を明白にしなければならない。だからもし、雇用者が労働者に、自分の生活基準に見合った賃金を支払っていないのであれば、彼を一定の比率で経営を共にする者とするのだ。

イスラームにおいて、労働への対価をさらに良くするという目的で行なわれるストライキや、労働者の取り分の決定へ圧力をかける為に雇用者が職場を封鎖することは勧められていない。なぜならストライキは労働者にも影響をあたえるものだからである。ストライキによって仕事が停止することは、労働者にとっても損失となる。ある意味でストライキの対義語でもある職場封鎖は、生産の停止をもたらし、失業問題に発展することもある。このようなストライキや職場封鎖の結果として、双方の利益が損なわれ、この状況は、先の読めない社会的・経済的な事象、さらには紛争の発生への可能性をひらくものとなる。

当然、人間関係において、不和は発生するだろう。だから自らを被害者だと認識する人々が訴えることのできる場が必ず必要となる。イスラームでは、この目的での奉仕の為に設営されているヒスベ（労働者）組織が存在する。イスラーム世界において預言者ムハンマドの時代から存在し続けているヒスベは、普遍的な意味で「善を命じ悪を禁じる」組織である。ヒスベは第2代スルタン・オマルの時代には完全な組織として機能しており、社会の平安を守る上でこの上なく重要な役目を果たしていた。普遍的な安定をもたらすだけではなく、必要不可欠な物資が人々の手に適正な安価で渡るよう、資本家や商人たちを管理すること、労働者と雇用者の間の問題を解決することも、この組織の役割に含まれていた。

いくつかのシステムが、一部の「力」を作り出し、この力のせめぎあい、もしくは諸要素の調整に負われていることに対し、イスラームは双方の間の均衡、調和を守り、それぞれの利益を一致させようとする。経済生活において、失業問題の発生を防ぎ、賃金の安定した支払いを基本的な目標とする。人々をこの目標

へと向かわせる際に生じる可能性のある不調和に対して、双方に必ず解決への道筋を示し、一方が他方を苦しめたり、社会形成に悪影響を及ぼしたりすることのないようにする。さらに、その基本においては主人も奴隷も、役人も労働者も、金持ちも貧者も区別することはない。こうして社会のメンバー間における調和や接近を支えるのだ。



イスラーム社会において人々は、国家やその役人をその肩に乗せているのだ。そして国家やその役人達は、その国の人々へ奉仕を行う。慈しみ深い羊飼いのように、慈愛に満ちた父のように、人々の幸福ややすらぎの中に自らの幸せや喜びを見出す。

このような社会においては、あらゆる組織を通じて教養や美德の感情が育てられる。愛情や人間らしい振舞いへの扉が開かれる。人々に慈しみや、互いに理解し、調和しあうことを教える。人々を無慈悲な行いや低俗な感情から、人間性を辱めることから、そしてあらゆる粗暴さから救う。特に、神聖な概念に対し敬意を抱くよう育てられる。

さらに、この輝かしい人々は、社会の中で自らを無力だと感じている非ムスリムの少数派、子供達、行き場を失った人達、失業者達が保護されるという点においても、根本的かつ継続的な処置をとっている。様々な援助基金を作り、全ての人々の手をとろうとしているのだ。

富裕者と貧者とのバランスという観点からも、イスラームは多くの、社会生活に均衡を与える基盤をもたらしている。ザカート、サダカ、犠牲、償い、寄贈、貸し借りなどが最初に思いつくものである。歴史が証言している事実として、これらが実践されている時代においては、今日のような社会階層間の格差もなく、それぞれの階層が憎悪や敵意を抱くこともなかった。なぜならムスリム達は、(表現がもし適切だとすれば)それぞれがアッラーの役人のように振舞っていたからである。ザカートや、必要ならサダカを、必要性を抱える人々へ十分に与えていたのだ。それによってイスラーム世界においては、一方の集団がこの上なく豊かで裕福で、もう一方の集団が貧しく飢えている、というようなことはありえなかったのである。この制度に従う人は、預言者ムハンマドの「隣人が飢えている時に満腹して眠る者は私達の仲間ではない。」という言葉の意味をきちんと理解し、それを実際の生活においても存分に実践していたのである。

イスラームにおいては、権利への配慮だけでは十分とされないのだ。ムスリムの富、財産に関して、他者もそれに権利を持っている、という意識のもとで振舞われるのである。うぬぼれや見せかけといった感情、恩を着せるといった考え方に陥ることなく、これらの権利から必要としている全ての人が益を得ることができるよう、支える。

この神のシステムにおいて、雇用者が思い上がった状態であること、富や財産をかき集めようとする、自分の幸福だけを考えることはよしとされていない。苦しみも喜びも分かち合うという概念が発展してきた。だからこそアブー・バクルは全ての財産を人々の幸福の為に費やしたのであり、初代カリフであったのにもかかわらず、死後、後に遺された一着だけの衣服をまとい、埋葬されたのである。オマルは、飢饉が起こった時、当時は国家の長であったが、パンを酢に浸して食べて生きながらえたのである。彼はカリフと共に、一頭だけの乗りものを交代で使い、ラクダにも順番に乗った。そしてこの事実も、当然のこのように見なし、謙虚に振舞った。アブー・フライラ・ビン・ジャッラは、軍が飢えに直面していた時代、自らも他の兵達と同様に一つ二つのナツメヤシで浚いでいた。アブー・ザッルは、ある時手に入った布を二つに分け、一つを自分用に、もう一つを雇っている労働者のものとして、服を作らせた。これらの行動の理由が問

われれば、預言者ムハンマドのハディースによって答えていた。「彼らはあなたの庇護のもとに与えられた兄弟なのであり、自分が食べているものから食べさせ、着ているものから着させなさい。その力以上の仕事を与えてはいけない。困難な仕事を与えたのであれば、彼らを手伝いなさい。」

最後に次のことを語っておきたい。ここで私が説明しようとしてきた事柄は、ユートピア的の伝説ではない。そうではなく、何世紀も前の、最も無慈悲な攻撃に対してすら揺らぐことのなかった、神のシステムの図なのである。マディーナで起こったことは一つの事実なのだ。預言者ムハンマドは非常に短期間で、このような徳の空気に満たされた国家を作られたのだ。もし、全体的な意味で、今日のムスリムの状態がここで示したものと一致していないとしたら、その問題はイスラームにおいてその欠点を求められるべきものではない。教えを知らない、そしてそれを実践しないムスリムに落ち度があるのである。

要するに、イスラームによるなら、考えや発想、思想において方向性が獲得されない限り、経済問題が安定し、均衡を持って継続していくということはあるにない。労働と資本の関係も同様である。雇用者と労働者は、一方が賃金を支払い、一方は労働を行いつつ、共にアッラーの管理のもとにいるという意識を、一瞬たりとも頭から消し去るべきではない。そしてあらゆる行為をこの意識のもとに行わなければならない。その時には、資本と労働の両方が聖なるものとなり、搾取する者・搾取される者という衝突や対立も完全になくなるだろう。このような社会にあっては、雇用者は労働者と共にあり、家族の一員のように彼と接する。食べるもの、着るもの、そして合法である限り全ての望みに対し援助を行う。労働者は、仕事と雇用者のそばにいる。富や雇用者への敵対から遠く、努力や勤勉の模範となろうと努める。仕事に最良の成果をもたらし、汗まみれになって働きつつ、崇高な世界において自らが励まされ、アッラーの御前において評価されていることを認識している。従って全てのことを、満たされた心で、イバーダの一種として行うのである。





ムスリムは帝国主義の罪を犯しているのだろうか⁴？

M.F.ギュレン

ムスリム世界はいまだにこの非難の矛先を向けられています。私は次のような質問を發することによってそれに反論したいと思います。

1400年前当時の状況を考えたとき、マッカやマディーナに住んでいる者で誰が自らの属する部族や仲間から搾取しようとするでしょうか。搾取の対象とされた土地や人々はヒジャーズ地方のものとされていますが例えそうだと、誰がいったい貧しく荒地で不毛なその土地を侵略し搾取しようなどと望むでしょうか。命を危険にさらしてまでもイスラームのメッセージを広めようとした極めて高潔なムスリムたちに対して帝国主義的な植民地政策の嫌疑をかけるなどばかばかしいにもほどがあります。彼らは人生の大半を、自らの子供や家族、自宅、そして生まれ故郷から遠く離れ、白軍の10倍も20倍もの規模を持つ敵と戦って過ごしたのです。そして戦場で命を落とさなかったときはイスラームの殉教者に早い段階で加われなかったことをひどく嘆いた人々でした。彼らがそのような奮闘、喪失、そして犠牲の見返りにどのような現世的な利益を得たのか我々は自問します。

帝国主義の最悪な意図（と結果）をもって他を侵略し、占領し、搾取したのは、権力欲の強い個人もしくは国家でした。いくつか例を挙げると、アレキサンダー大王、ナポレオン、ローマ帝国やナチスドイツ、チンギス・ハーン率いるモンゴル軍や西欧の植民地軍、ロシアの独裁政権（帝政支持者および共産主義者）、アメリカ帝国（「マニフェスト・デスティニー（領土拡張政策）」および「民主主義のために世界を平和にする」という考え）などがあります。かような征服が行われた地では、征服者と被征服者の道徳性は破壊され、混沌や衝突、多くの涙、流血そして荒廃が引き起こされたのでした。今日その後継者たちは、資産を盗んだことを隠すためにその資産の所有者を名乗るといったりをはかる厚かましい泥棒のごとく、イスラームやその預言者と教友たちの名誉を汚すことに矛先を向けているのです。

真のムスリムたちが他を搾取しようとしたことなど決してありません。ましてやムスリムの政府が権限を掌握しているところで他の者にそれをやらせることもありませんでした。ムスリム軍が勝利に次ぐ勝利を収めていた時代、正統カリフであるウマルの言葉は次のようなものでした。「私に相応しいのは最も貧しいムスリムのレベルで生きることである。」そして彼はその言葉通りに実践したのでした。栄養補給として日に何粒かのオリーブを摂取しただけだった彼が誰を搾取していたというのでしょうか。

ある戦いのあと一人のムスリムが、彼が戦って殺した敵兵の所有物を持ち帰らないのかと尋ねられたところ、彼の返事は次のようなものでありました。「私は戦利品を獲るためにこの戦いに参加したのではない。」彼は自分自身の喉をさしてなおも続けました。「私が求めるのはここに矢が刺さって殉教者として倒れることである。」彼の願いは聞き届けられました。殉教の望みに焼き焦がれている人が誰を搾取していたというのでしょうか。

別の戦いであるムスリムは、多くのムスリムを殺した敵の有力者と戦い殺害しました。ムスリム軍の

⁴ この文章が「Questions and Answers About Faith (Vol.1)」よりの訳です。

指揮官はその者が亡くなった敵のそばを過ぎ去るのを目撃しました。指揮官は亡くなった兵士の頭のところに駆けつけ、誰が彼を殺したのかと尋ねました。そのムスリムは返事をためらいましたが指揮官は神の名の下に彼を呼び戻しました。ムスリムはやむなくそれに従い、しかし自身の顔を一枚の布で覆い隠しました。以下はその時交わされた会話です。

「そなたはアッラーのために彼を殺したのか？」

「はい。」

「よろしい。しかしこの1000ディナールを受け取りなさい。」

「しかしアッラーのために行ったことなのです。」

「そなたの名前は？」

「私の名前がなんだというのですか？あなたがこのことを皆に話すことによって私が来世で受け取るはずの報奨をだめにしかねない。」

このような人々が他を搾取し世界中に植民地を建設するということがありえるのでしょうか。イスラームとムスリムを嫌悪する人々は、イスラームがいかにして広まったかという歴史的真相を理解できないというのが正直な感想です。

搾取そして帝国主義とは何なのかを見てみましょう。帝国主義もしくは植民地化は、豊かで強大な国家が他国やその通商、政治を支配し、他を犠牲にして自国を富ませさらに勢力を増すための統治方法です。搾取には様々な種類があります。現代の世界では次のような形態をとるでしょう。

- ・侵略者の直接統治と主権を確立するため、先住民を立ち退かせることにより行われる完全な統治。西欧による南北アメリカやオーストラリア、ニュージーランドの征服、さらにはシオニストによるパレスチナ征服などが挙げられます。

- ・侵略者が被征服国の土地と資源を支配できるようにするための軍事占領。イギリスがインドで行った植民地支配など。

- ・一国の内政や外交問題、経済、防衛に公然もしくは非公然に干渉すること。先進諸国に操作され支配されている第三世界の国々など。

- ・知識人の移動。これは現在ごく一般的に行われかつ非常に危険な帝国主義の形態となっています。搾取されることとなる、若くて高い知能を持ち、才能溢れる各国の人材は、選り出され、奨学金を与えられ、そして海外で教育を受けます。そこで彼らは各種団体と引き合わされ、その一員とされます。彼らが帰国すると、国運に影響を及ぼせるよう、影響力のある行政その他各種のポストが与えられます。海外で搾取を行う人々となつながりを持った自国民もしくは外国人が国家機構の重要な地位に据えられている場合、その国は内側から征服されていることになるのです。この非常に功を奏する手法によって、両側の帝国主義者たちは支配下に置こうとする人々からあからさまな反感を招くことなく、かつ円滑に目的の多くを達成することが出来たのです。今日ムスリム世界はこの罠にはまり、かくして搾取と虐待に苦しみ続けているのです。

どのような種類の帝国主義の影響下におかれるのであれ、各国は多くの結果に見舞われることとなります。

・各種の同化は人々を独自の価値観、文化そして歴史から遠ざけます。結果としてアイデンティティや目的意識の危機に陥り、自らの過去を知らず自らの将来を自由に想像することができなくなってしまうのです。

・自国を支え発展させようとする熱意や努力、意欲といったものが抑制されてしまいます。産業は(かつての)帝国主義下の主人に依存して奉仕する形となり、科学や知識は生産的かつ本来の姿になることを許されず、研究や新しい調査を行う自由が足掛かりを得ないよう模倣がしっかりと定着しています。

・人々は中途半端な状態に置かれたままで、外国人に依存した状態となります。彼らは進歩や西欧化、文明化などといった空虚な語句に口を封じられ、騙されているのです。

・あらゆる国家機関には外国の支援が浸透しますが、現実とはいうと大規模な経済的・文化的負債を負っているにすぎないのです。輸出入や発展は搾取人の利益に応じて完全に支配され遂行されます。

・大衆が貧困状態にあり続けるための努力は惜しまない一方で、支配層は度を越した出費や贅沢に慣れきってしまいます。その結果社会に生じる不平は人々を互いに戦わせることとなり、外側からの影響や介入をさらに受けやすい状態にしてしまうのです。

・知的・精神的活動は抑え込まれ、教育機関は外国のやり方や考え方、科目を模倣する傾向となります。産業は既成の部品を組み立てるだけのものに縮小されます。軍は帝国主義諸国にとってのごみ廃棄場となりがちです。というのは軍が高価な武器を購入することによって後者の継続的な福祉が確保されるからです。

イスラームの征服を、行く先々で悲惨な結果をもたらしてきた帝国主義になぞらえるのは本当に道理にかなったことなのでしょうか。

ムスリム軍の勝利によって人々が大量に家々や国々から流出したことなど決してありませんでした。ましてや手や足に鎖を巻きつけて人々が働くのが阻止されたことなどありません。ムスリムは彼らのやり方や信仰に従うかどうかを現地の人々の自由に任せ、ムスリムを保護するのと全く同様に彼らをも保護したのです。ムスリムの統治者や指導者はその公正さと高潔さゆえに愛され、尊敬を集めたのです。平等、平和、安全が異なる地域社会の間に確立されました。

もしそうでなかったとしたら、ダマスカス在住のキリスト教徒たちが、町の奪還を狙っていたキリスト教であるビザンツ帝国に対してムスリムが勝利を収めることを願い、教会に集って祈りを捧げたりしたでしょうか。ムスリムが非ムスリムの権利をそれほど尊重していなかったとしたら、端から端まで移動するのに6ヶ月以上かかるような広大な国家の治安を何世紀にも渡って維持し続けることができたでしょうか。

我々は今日の統治者と比較して、当時のムスリム統治者や彼らを突き動かしたダイナミックなエネルギーに敬服せずにはいられません。あらゆる最新の輸送手段や通信手段、そして軍部の支援があるにも関わらず、今日の統治者はほんのわずかな土地の一角でさえも平和と安全を維持することができないのです。

イスラームの世界規模の統治をもたらし、来世における我々の永遠の存在の基礎をなすイスラームの力学の価値を認識する多くの学者や知識人たちは今日、ムスリムが再考しそれらを取り戻すべきだと我々にはっきり告げてくるのです。土地を征服していく中でムスリムは現地の人々の心をも獲得していったのでし

た。彼らは愛と、敬意と、服従でもって迎え入れられました。イスラームを受け入れた人々でムスリムの到来によって文化的な阻止や破壊を受けたと訴える者は誰もいないのです。キリスト教ヨーロッパによる征服の真実との対比は明白で今さらいうまでもないでしょう。

初期のムスリムは征服した各地の知識や美術の可能性を評価していました。彼らは地元の学者や科学者たちが研究を追及できるよう、あらゆる機会を準備し提供していました。宗教がなんであろうと、社会の中でそうした人々を重視し尊重したのです。アメリカにいるイギリスの植民地主義者の子孫がネイティブアメリカンにしたような、もしくはオーストラリアでアボリジニーにしたような、またフランス人がアルジェリア人にしたような、そしてオランダ人がインドネシア人にしたようなことを、ムスリムは決してしませんでした。それどころか彼らは征服地の人々をあたかも同じ民族の同じ宗教の人々であるかのように扱い、兄弟姉妹のように接したのです。

正統カリフのウマルはかつて、マッカ出身の有力者に殴られたコプト教徒のエジプト人に対し、自らが殴られたのと同様に殴り返すよう言い渡したことがありました。アムル・イブン・アル＝アースがエジプトの地元民の感情を害したことを聞きつけたウマルは、彼を叱責しました。「人間は自由に生まれついているのである。そなたはなぜ彼らを奴隷扱いするのか。」アル＝アクサー・モスクの鍵を受け取りに向かった際には、ウマルはパレスチナにある様々な教会の聖職者たちを訪ね、語り合いました。あるとき礼拝の時刻が訪れたときに彼はある教会にいました。聖職者は彼に教会内で礼拝するよう何度も勧めましたが、ウマルはこう言ってそれを断りました。「あなたは後々、私をこの教会内で礼拝させたといって、他のキリスト教徒たちから嫌がらせを受けることになるかもしれません。」彼は教会の建物を出て、屋外の地面の上で礼拝を捧げたのです。

これらはムスリムがその他の人々に対していかに繊細であり、寛容で、公正で思いやりに溢れていたかを示すほんの数例にすぎません。このような真の寛容の態度は、他のどの人々や社会によっても達成されてはいないのです。

購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

（2004年、2005年、2006年のやすらぎカバー付き製本：郵送料込み 2500円）

郵便振替口座番号: 00100-6-354012 口座名義: 月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号: 630（春日部） 口座番号: 1134374 口座名義: 月刊誌やすらぎ

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com>

info@yasuragiweb.com

yasuragi_nihon@hotmail.com

「やすらぎ」編集部